Nara Women's University

六年一貫教育における保健体育の問題点

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部附属中・高等学校 公開日: 2010-11-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米田, 博行, 出野上, 良子, 奈良, 重幸, 山中, 昭生, 渡辺, 幸子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2315

六年一貫教育における保健体育の問題点

保健体育科

米田博行・出野上良子
奈良重幸・山中昭生
渡辺幸子

はじめに

本校における六年一貫教育がスタートして四年目を迎えた。その間、保健体育科も六年一貫カリキュラムを作成し、実践してきた。カリキュラムの作成にあたっては、内容の重復・反復をできるだけ避け、教材を精選し、生徒の発達段階や将来の運動生活を考慮に入れ、生徒が自主的に運動に取り組めるよう配慮した。つまり、低中学年（中学１～高１）では、運動領域全般にわたるものを二年毎のひとまとまりで学習できるようにし、高学年（高２・３）では、将来の社会生活に備え、球技に関する教材を増やし、選択制を取り入れた。また、学校行事（体育大会、球技大会、水泳訓練等）との関連性も考慮に入れて、教材を配当しなおした。（本校研究紀要、第15集参照）　保健教材も、個人の健康 → 家庭・職場の健康 → 国民の健康とより広い視野を必要とする方向に配列しなおした。いままでの取り組みをふり返って、一定の成果と思われる点、今後の問題点を中間的な反省として述べることにする。

一定の成果

Ⅰ　一教材に配当される時間数が多くなり、その結果、学習が集中的に行なえるようになったこと。

従来の指導要領に準じたカリキュラムでは、多分に内容の重複がみられ、中学校で順次学習されたことが、高校に進んだ時に、漫然とくり返し学習されているきらいが少なからずあった。また一教材にかける時間数が少なかったため、教師側にもゆとりがなく、いきおい断片的、コマ切れ的な授業内容におちいる傾向も強かった。それに対して、一貫カリキュラムでは、教材の重復を避けたためまとまりのある指導が行なえるようになり、球技などのグループ活動が活発になった。また、集中的に学習されるようになった結果、技能面での向上も見られるようになった。

Ⅱ　学校行事との関連をより考慮に入れて教材を配当したため、学校行事が、より効果的に行なわれるようになったこと。

学習に時間的余裕が生じた結果、前述したように技能的な面での向上がみられるようになったが、特に水泳において、学習効果が著しくなった。そのため水泳訓練そのものが、従来よりも

安心して行なえるようになった。また、球技大会、体育大会へも、より意欲的に参加できるようになったと思われる。

問　題　点

Ⅰ　指導内容の具体化の必要性

同一教材を長期にわたり、教えていかなければならない現状において、教師自身が授業に対処する仕方に、より創意工夫していくことが必要となってきた。というのは、現行カリキュラムでは各運動領域において大雑抱な種目については決定されているが、具体的な内容にまで綿密に考察されて決定されているわけではない。例えば、器械運動のマット運動では、どういう種目を、どのような方法で扱うかについては漠然としている。教材の内容については、正直なところ、一個人のみの指導方法・内容では画一化をきたし、行き詰りを覚えやすい。教師集団が、指導内容について討議・研究しあうことが必要であり、具体的に、指導方法をまとめあげなければならないと思われる。

Ⅱ　施設・用具・場所の問題

本校は比較的、施設・用具・場所とも恵まれた条件にあるが、一貫カリキュラム通りに行なえば無理な点が生じてくる。同時に数クラスの授業が行なわれる場合など、施設・用具不足のために十分な学習ができないことが多く、今後、高学年での選択制学習を完全に実施すれば、問題はより深刻になると思われる。このことは、クラス編成の方法や時間割の調整などによって、少しは改善できるとも考えられるが、現行の学校全体のカリキュラムとの関係・予算などの関係からみれば、依然として困難な点であろう。

Ⅲ　体力の問題

体力の増強という面については健康課の指摘もあるように「本校生は全体的に体格はすぐれているが、それにみあった体力がない」のが現状である。現在の週３時間程度では、体育における体力の向上は望めない。体力の向上を期すならば、１日２時間、週３日（週６時間を隔日配当する）位の時間数が必要と思われるが、現状では、不可能に近いのぞみであろう。また、男女差による履修時間の差（高１・２年、男子週４時間、女子週２時間）も、女子の体力向上という面から見ても大きな問題点であろう。

Ⅳ　一貫カリキュラム再考の必要性

一貫カリキュラム作成後、それに準じて実際に授業を行なってきた結果、各運動領域内における教材の配当がはたして妥当なものであるかどうかという懸念が生じてきた。つまり、ある目的をもって、ある運動教材を、ある学年において実施されるようになった時に、その目的にかなうためにどのような方法で授業をすすめていけば良いのかを考えてみれば、この一貫カリキュラムの教材配当の仕方が、必ずしも系統的なものだとは考えられない面も生じてきた。この問題についても、私たち教師が、教材の技術的構造を明確にし、それにもとづいて、より科学的・系統的な指導が行なえるよう努力する必要があると思われる。

おわりに

新カリキュラムの実施後、かなりの月日が経過しているにもかかわらず、十分な討議・研究が重ねられていないことを痛感している。一貫カリキュラムは一つの試案であり、日々の実践を経て、討議・研究され改善されなければならないものである。現在、それぞれの担当の教官が独自の工夫で指導法の検討をすすめているわけであるが、今後、教科としての各運動領域の教材についての指導法をまとめ上げ、一貫教育を軌道にのせたいものである。